

「日本的集團主義」と「柔らかな個人主義」

のイデオロギーの意味

——日本における個人主義の受容——

はじめに

中村 浩爾

日米經濟摩擦の激化のなかで、以前ほど「日本的經營」に樂觀的な人はいないとしても、日本（經濟）の成功の原
因を、日本人の集團主義あるいは日本的なるもの（それらはしばしば「和」の精神と呼ばれるが）に求める傾向は決
して減っていない。多少現代的な装いをこらしていても、根強く存在しているのである。それは裏をかえせば個人主
義の批判の悪さでもある。その墮落形態に対して批判が加えられるのみならず、元來個人主義は近代化に適合的では
ない（＝むしろある種の集團主義の方が適合的なのだ）という風に個人主義そのものに対しても批判が加えられてい
るのである。

なかでも、「ホロニック・パス」(holonic-path) という考え方は、一九八〇年の大平総理の政策研究会の一つであ
る「科学技術の史的展開」研究グループ⁽¹⁾の基調をなす考え方であるが、単に一研究分野・研究グループの用語に止ま

らない影響力をもっている。それは九つの報告書の総論及びこの政策研究会の大蔵官僚によるまとめであるところの『近代を越えて——故大平総理の遺されたもの——』⁽²⁾を読めば明らかである。そして「ソフトノミックス」という発展概念が造られ、⁽³⁾「ソフトノミックス・フォーアアップ研究会報告書」が相次いで刊行されつつあること、⁽⁴⁾また、「ホロニック・カンパニー」という新しい経営理念が登場していることは、この考え方が、政策研究レベルで継続・発展しているのみならず、民間にも広がりつつあることを示している。その意味で、これを現代日本における主流イデオロギーの一つとみなしてもよいであろう。⁽⁵⁾（このような広がりや、一定のイデオロギー的操作の結果とみるべきか、それとも客観的基盤のなかからの同時発生的なものとするべきかは別に解明を要する問題である。）

「ホロン (holon)」は元来は生命科学の用語であり、「ホロニック・パス」という概念も、自然環境のなかに適合して薪を燃料としていた前近代型の「ソフト・パス」と石炭・石油を燃料とする巨大科学・巨大施設の「ハード・パス」に代わる「第三の道」として案出されたものであり、その射程には限界があると思われるが、実際にはその限界をはるかに越えて一般化して用いられている。⁽⁶⁾とくにこの概念が社会に適用された場合には、個人主義を否定するのみならず、個人主義か集団主義かという思考枠組自体を否定する「間人主義（間柄主義）」と等置され、それが日本文化の特質であるとさえいわれる。浜口恵俊氏の「日本的集団主義」はその典型的な主張である。

ところで、浜口氏以上に一層直接的に政府の政策研究に協力しており、その意味で政策研究会や「ソフトノミックス・フォーアアップ研究会」の基本理念を共有していると思われる山崎正和氏は、浜口氏とは対照的に「柔らかな個人主義」を提唱している。これは一見奇妙なことである。なるほど、この政策研究会が「一党一派に偏することなく」組織されたという長富氏の言葉を信ずるなら、また、同種の諮問機関、たとえば臨教審における小さくない意見の対

立を想起するなら、このようなくいちがいは驚くにあたらないかもしれない。しかし、個人主義か集団主義かという選択は、現状認識の面でも、価値意識の面でも、妥協の余地のない二者択一のようにみえる。二人の主張を整合的に理解しようとすれば、次のような疑問を禁じえないのである。即ち、「日本の集団主義」は果して本当に個人主義対集団主義の二元的対立をこえた「第三の道」なのか？ 全体を考慮する個人という山崎氏の構想は、実は従来の個人主義と同じではないのか？ 「柔らかな個人主義」は文字通り個人主義の肯定なのか、それとも、結局は個人主義の否定につながり、その意味で「日本の集団主義」とのイデオロギー的同質性をもっているのではないか？ 等。これらを明らかにすることは、「柔らかな個人主義」及び「日本の集団主義」の主張を明確化すること、両者が属している思想潮流の性格を明らかにすること、そして日欧の個人主義、とりわけ日本における個人主義の現在及び将来を明らかにすることにつながると思われる。

注

- (1) 『科学技術の史的展開』（大平総理の政策研究会報告書8）大蔵省印刷局、一九八〇年。
- (2) 長富祐一郎『近代を超えて——大平総理の遺されたもの——』大蔵財務協会、一九八三年。
- (3) 「ソフトノミックスの提唱」（大蔵省の委託を受けた「経済の構造変化と政策の研究會」報告書）一九八三年。
- (4) 一九八三年九月に大蔵省が三十九のチームに委託。一九八四年六月以降公表されている。
- (5) 北矢行男『ホロニック・カンパニー』TBSブリタニカ、一九八五年。
- (6) 石井威望『ホロニック・パス』講談社、一九八五年。
- (7) もっとも、この言葉をつくり出した側の意図としては、はじめからそれを狙っていたともいえるが……。たとえば、次の記述にその意図が読みとれる。『科学技術の史的展開』の報告書が出た昭和五十五年というのは、いまから考えると、社会の動きそのものが「ホロニック」な方向へ大きく転針しつつあった時といえる。……「ホロニック・パス」という新しい術語が担

つていたのは、まさに長期展望に立ったそうした新しいフィロソフィー、新しいロゴスの創造だったわけである。(原文改行)
 “ホロニック・パス”の提唱が、これからの日本の長期展望に立ったものである以上、それはたんに純粹科学の指導理念としての役割にとどまらないはずであった。石井威望『ホロニック・パス』一九八頁。

一 日本的集団主義分析

(1) ホロニック・パスと「日本的集団主義」

ホロニック・パスと「日本的集団主義」との関係は二つの方向から明らかである。まず、ホロニック・パスの側からは、次のような説明がなされる。政策研究会報告書においては、「『人と人との間柄』を大切にする日本文化においては、人は個としてよりも『なかま』と一緒にいることによって集団に帰属し、その集団は活力ある部分システムの独自性と多様性を尊重する『しなやかな』分散型構造を特質としている。日本文化のこの特質は『ホロニック・パス』に適しているものと考えられる。」⁽¹⁾ソフトノミックス・フォーアップ研究会報告書においては、「このような欧米のアトミズム的発想の基礎には、二分法(ダイコトミー)があり、Aと非Aと二者を峻別・対比し、『人間』という言葉にみられるように、人と人・人と自然など相互の間柄・かわりあいを大切にする日本では、みんなの顔が立ちまわるとく治まるように『統合』が好まれる。こうして日本においては、個人主義はタテマエの世界におかれ、『間柄主義・人間主義』がホンネの世界で強く働いて、それが日本社会の活力となり、近代化・工業化を成功させてきた、といわれる。」⁽²⁾「ホロニック・パスという新語の誕生に携った石井威望氏の説明では、「近代の『個』が『裸』の『独立子』で

あるとすれば、『ホロン』は全体と個、種と個体の関係を尊重し、その間柄の調和ある発展を目指す存在であるといえる。いいかえるなら、自己組織化を生み出す存在として、つねに生きている自然とかかわりあいながら『人と人との間柄』を大切にする。着物を着た (dressed) 人間²である。……西欧近代文明ではモノが厳然として存在し、コトは意識的に除外されてきた。デカルト流の二元論がモノ重視のこの考え方の典型であり、精神や心まで分割しようとする。これに対して、コトは間柄とか関係を意味し、存在ではない。もちろん存在がなければ関係も成り立たないが、関係が初めて始めて存在が存在たりうる。——これが『間柄主義』の考え方であり、ホロニックな立場である。³⁾逆に、「日本的集団主義」の側からは次のような説明がなされる。『間人』は『個人』と違って、ソーシャル・システムのたんなる一部分ではない。むしろアーサー・ケストラーが言っているような一つのホロン、すなわち『亜全体・亜個体』です。そういうホロニックな人間存在を想定し、全体であると同時に部分でもある人間が実際に組織なり社会というものをつくり上げているのだ、といった何かシステム理論的な説明をすれば、日本的集団主義が今後社会編成原理として有効だということが彼ら〔アメリカ人達〕にも了解される可能性がでてくるのではないか。⁴⁾

(一) は筆者の注。

これらを見れば、ホロニックな考え方を社会に適用すれば、日本的集団主義になるというより、両者はもともと共鳴し合いながら自らを形成しているとみる方がよさそうである。とくに、石井氏の説明では、ホロニックな立場イコール「間柄主義」であることが疑いもなく示されている。

ところで、注意すべきは、ホロニックな考え方の広がりにおいて、日本的集団主義を否定する考え方が登場していることである。たとえば、長銀経営研究所調査企画室長の北矢行男氏によれば、「日本的経営」——そのメリットは

次の三つであると言われる、即ち、①年功序列制と終身雇用制が従業員の会社への忠誠心を高める ②稟議制によるボトムアップ型の意思決定は全社的な意思統一と団結を強化する ③集団主義のもとで共同責任による業務の遂行は各自の能力の不備を補い成果を向上させる——は、高度成長期から二度にわたる石油ショックを克服する過程において最もその真価を發揮したが、「欧米先進国と肩を並べ、見習うべきお手本がない状況のもとで、自前で目標を設定していくことが求められるようになると、急にそのデメリットが目立つようになってきた」という。「一社一心のガンバリズムによって企業が物事に対処しえたのは、目標と手段が明確で効率が最大の価値原理であった大量生産時代までである。価値観が多様化し、とぎすまされた感性の持ち主が増えてきている今日では、もはや変に精神主義を要求する『儒教的・道徳的経営』にはみんなもうウンザリしている。今求められているのは、面白く仕事をしようとする、ある意味で『アツケラカン』とした精神なのである。そのような精神の持ち主がお互いを人間として、市民として尊重しあう、日本的集団主義を超える、『経営リベラリズム』こそが今求められているといえよう。」(傍点筆者)おそらく、これが現代の最先端の考え方であり、ホロニックな考え方の本来の発展方向だと思われるが——そして、大学・高校スポーツ(とくに野球やラクビー)における、管理主義に代わる自主性尊重方針の成功をみれば、このような考え方が単に企業内のみならず、広く社会的に要請され、存在していることがわかるが——、ここでは注意を喚起するに止め、ホロニック・パスと日本的集団主義を同一視する立場の検討にもとることとする。

(2) 「日本的集団主義」という用語について

ここで取り上げている「日本的集団主義」は浜口恵俊氏の関連著作及び浜口・公文編の『日本的集団主義』及び浜

口編『集団主義——日本らしさの原点——』⁽⁷⁾の用語であり、主として浜口氏の用語であるが、実は文字通りの集団主義ではない。たとえば、浜口氏は、日本人の集団主義の典型としてよく引き合いに出される五島列島の村議会の全員一致の例を、主体性の欠如どころか独特の主体性の存在の例として解釈している。即ち、そこには、つき合いのため賛成という現実的な合理的な判断が働いており、「豊かに備わったシステムの自律的な表出」にほかならないという。そして「日本の集団主義」を次のように再定義している。「日本の『集団主義』とは、各成員が仕事をする上で互いに職分を超えて協力し合い、そのことを通して、組織目標の達成をはかると同時に、自己の生活上の欲求を満たし、集団レベルでの福祉を確保しようとする姿勢を指していよう。ここでは『個人』と『集団』との相利共生 (sym-biosis) が目指され、かつ成員間での協調性 (人の和) が重視される。それは、福祉組織の確立を通して自己充足をはかる協同団体主義 (corporativism) だと言い換えられるべきであろう。」⁽⁸⁾これを見れば、「日本の集団主義」が文字通りの集団主義として理解されるべきでないことは明らかである。しかし、浜口氏自身、「協同団体主義」という用語はまだ十分熟していないとして、通りのよい「日本の集団主義」を用いざるをえなかったこと、そして日本的なるものの実体を明らかにすれば、それは日本人の集団志向性を表わす用語としては不適切ではないと考えていること、また、「日本の集団主義」が和の精神を意味していることなどから、一応、集団主義の一種として理解しておいてそれほど大きな間違いはないものと思われる。

(3) 「日本の集団主義」——個人主義

そのことは、浜口氏の個人主義に対する批判を見れば一層明らかである。浜口氏は、西欧におけるような個人主義

説

論

の純粹型に近い形の近代化はむしろ例外であり、近代化一般のためには個人主義よりもある種の集団主義が適合的であり、日本の場合にはイエスの集團主義が近代化に大きな貢獻をしたが一般的には個人主義か集團主義かのいずれかの極にいきやすい (ex. アメリカの徹底した個人主義かロシアや中国の社会主義) という公文・村上・佐藤氏らと立場を共有している。また、浜口氏は、ここでいう「徹底した個人主義」を F. L. K. Hsu のいう「激しい競争性 (fierce competitiveness) と「進取的な創造性 (aggressive creativity) の二つの屬性をもった rugged individualism (浜口氏によれば「競争的自律性」をめざす価値意識) と重ね合わせて、それとは違う日本独特の原理を見出そうとして (註) いる。

浜口氏は、個人主義に代わるものとして、間人主義を提起するが、それは次のように対比される。個人主義の基本屬性が①自己中心主義 (ego-centeredness) ②自己依拠主義 (self-reliance) ③対人関係の手段視 (regard for interpersonal relations as means) である (インサイド・アウトの原理と呼ばれる) のに対して、間人主義の基本屬性は①相互依存主義 (mutual dependence) ②相互信頼主義 (mutual reliance) ③対人関係の本質視 (regard for interpersonal relations as an end itself) である (これはアウトサイド・インの原理と呼ばれる)。そして、これは人間モデルにおける「個人」(単独的主体) と「間人」(関与的主体)、自己意識における「自我」と「自分」、分析概念における「パーソナリティ」と「レン (Jen)」との対比に対応している。とくにこのなかで、パーソナリティとレンの対比は、シュエーの「対人的均衡仮説——ひとは社会生活のなかでつねに他者との間で良好な心理 || 社会的ホメオステシス (psychosocial homeostasis) を保とうとする、つまり各人は他者との間で一定水準の心的均衡を維持しようとする」という仮説——及びそのモデルとしてのレンの概念に依拠したものであるが、人間存在としての人間

という考え方を心理学的に裏付けたものとして示唆に富む。⁽¹²⁾

(4) 「日本的集団主義」の国際化の論理

さて、「日本的集団主義」が文字通りの集団主義ではないとしても、個人主義との関係においてはやはり集団主義の側に属し、決して個人主義と集団主義のいずれとも違う第三の原理とは呼べないものであることはほぼ明らかであるが、それは「日本的集団主義」の国際化の論理のなかで一層明らかになる。

浜口氏は「日本的『集団主義』は日本人どうしの間では自明の組織原理のだが、外国人にとっては理解することすらかなり難かしい理念である」⁽¹³⁾ことを自覚しながらも、また、「国内的にみたときには順機能を持ち、国際的には逆機能をもつ日本的集団主義を背負うわれわれ日本人はこのジレンマをいかにして解決していくことができるであろうか」という疑問を田崎氏と共有しながらも、結論的には極めて楽観的な主張をしている。即ち、海外に進出した日本企業が集団主義的な労務管理を実施してうまくいっているという若干の事例を根拠にして、「私たちは、日本的集団主義の『国際化』により注意を払い、その社会的効用をもっと外国人に説くべきではないか。和魂⁽¹⁴⁾と才としての『人の和』を、テレビや車の代わりに、どんどん輸出したらよいと思う」⁽¹⁵⁾と述べているのである。ここには「日本的集団主義」が、もともと国際比較の観点を含み、しかも日本的なるものの普遍性、あるいは優位性、の観点を含んでいることが端的にあらわれている。また、「日本的集団主義」とホロニック・パスを同一視してよいとすれば、次の石井氏の主張もその補強例としてあげることができる。「『ホロニック・パス』が普遍妥当性をもった指導的なフィロソフィーとなるためには、やはり国際社会において説得力をもたなくてはならない」⁽¹⁶⁾もつとも、石井氏の場

説合は強引な押しつけではなく、説得性を強調していること、また、浜口氏も別の箇処では、「日本的集団主義」は「収斂すべき一つのモデル」であるという、やや緩和された表現をしていることには注意を要するが、両者ともに日本の主導（指導）を唱えていること、また浜口氏の場合、「日本的集団主義」が伝統的な「和」の精神であることが示されていることは、それ以上に注意すべき点である。

注

- (1) 内閣官房内閣審議室分室・内閣総理大臣補佐官室「二十一世紀へ向けての提言」大平総理の政策研究会報告書（一九〇年）所収。
- (2) 長富祐一郎氏によるソフトノミックス・フォーアアップ研究会報告書序文、一九八四年。なお、ここで長富氏が参照を求めている文献に、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』と並んで、浜口『間人主義の社会 日本』があることに注意。
- (3) 石井前掲書、三九—四〇頁。
- (4) 座談「日本的集団主義の国際化は可能か」における浜口氏の発言。浜口・公文編『日本的集団主義』第九章。
- (5) 北矢前掲書、二二—二三頁。
- (6) 同書、八九—九〇頁。
- (7) 『集団主義——日本らしさの原点——』【『現代のエスプリ』一六〇号】至文堂、一九八〇年十一月一日。
- (8) 浜口・公文編『日本的集団主義』一七頁。
- (9) 公文・村上・佐藤「イエ社会としての日本——日本近代化分析——」中央公論、一九七五年十月号。
- (10) 『集団主義——日本らしさの原点——』一三〇—一三三頁。
- (11) 浜口『間人主義の社会 日本』（東洋経済新報社、一九八二年）一四〇—一五二頁。
- (12) Francis L. K. Hsu, *Psychosocial Homeostasis and Jen: Conceptual Tools for Advancing Psychological Anthropology* (American Anthropologist, vol. 73, No. 1, Feb. 1971).

もつとも、このレンがパーソナリティとは異なった心理構造をもっているとしても、個ではなく、いきなり関係からはじまっているかどうかは疑問である。

(13) 浜口前掲書、五六頁。

(14) 筑波会議レポート「人間関係・社会関係」部会「日本的人間関係をめぐって」(日本経済新聞一九七九年二月五日)

(15) 浜口前掲書、五七頁。

(16) 石井前掲書、一九九頁。

(17) 浜口前掲書、一三〇頁。

二 柔らかな個人主義

(1) ホロニック・パスと柔らかな個人主義

山崎正和氏は、大平総理の九つの政策研究会のうち、「文化の時代」・「田園都市構想」・「環太平洋連帯」の三つの研究グループに加わっているだけでなく、ソフトノミックス・フォローアップ研究では、第一部五「ソフト化社会の人間と文化」のキャップとして報告書をまとめている。また、サントリー文化財団の運営にも関与し、最近では同財団が編集している季刊誌「アステイオン」の編集委員を務めている。(ちなみに、他の編集委員のなかには、D・ベル、H・パッシンの名がみえる。)このような姿勢は、山崎氏が政府や財界の文化戦略に積極的に乗っていること、あるいは、当の文化戦略そのものをつくり出していることを示している。ホロニック・パスとの直接的関係は明らかではないが、ホロニックという言葉が、その生成過程でも(はじめは「ニューソフト」と表現されていた)¹⁾その

発展過程でも(「ソフトノミックス」の提唱をみよ)ソフトを含意していること、また、「ソフトノミックス」の説明において長富氏が「今後の欧米社会と日本社会は『多様な間柄を帯びた個性化』という同じ文化の方向へ向かい、二十一世紀へかけてのソフト化社会に『柔軟な個人・間柄主義』で対応していくのではないかと期待される」と述べ、山崎氏の『柔らかな個人主義の誕生』の参照を求めていることは、⁽²⁾ホロニック・パスと山崎氏の「柔らかな個人主義」の密接な関係を示している。

(2) 「柔らかな個人主義」の理論的背景

山崎氏は、一九七〇年代を国家イメージの縮小の時代、地域IIの時代とみなし、そこにおける変化(職場と家庭で過す時間の減少、高齢化、青年のモラトリアム状態、普遍的な不幸の減少)に対して、日本人の反応は「伝統的な倫理」と「日本独特の『集団主義』」の二つがあったが、これらは「じつは同じ産業化の強力無比な推進機だったのであって、いいかえればまさに現在の脱産業化現象を招き寄せた原動力だったのである。……それらがほかならぬ今日の社会変化を生んだ遠因だとすれば、それらだけに頼って変化に伴う問題に対処できないのは自明であろう」という。そして、「より積極的な新しい個人主義」の探究の必要を説き、その萌芽がすでに存在していると主張する。⁽³⁾

その理論的根拠は、一つはD・ベルの「脱工業化社会論」であり、一つは彼自身の日本文化観である。前者については、「脱工業化」ではなく「脱産業化」という訳語を使う点や、ベルが脱工業化社会は社会の単位が個人であるよりはむしろ共同体であるといっているのに対して、山崎氏は共同体ではなく個人という逆の結論を導いている点や、ベルが脱工業化社会という概念を限定的に「技術—経済的な」次元に限って用いているのに対して、山崎氏は政治や

文化の次元にまで広げて用いている点などに対して批判があり、彼の消費や欲望の概念と共に問題の多いところである。しかし、ここで注目したいのは彼の日本文化観である。山崎氏は「柔らかな個人主義」の萌芽が消費社会のなかで既に生じているというのであるが、それに止まらずその萌芽が室町時代にさかのぼって発見されるという。「近代以前の日本は、もちろん一神教の信仰を持たず、西洋語と異質の言語を用い、異民族との接触が乏しいといった点で非西洋国であったが、産業化への適応性という点では、若干の西洋諸国よりも西洋的だったといへる。きはめて早い都市社会の形成、新しい価値への好奇心と生活改善への意欲、大衆教育の普及と身体的技術への関心、商業の尊重と高い商業倫理の確立、そして『石門心学』に象徴される宗教的な勤労精神など、産業化を基礎づける要件は、ほぼ室町時代から用意されていた。……不幸にも、近代化初期の日本人はその事実気づかず、過度に産業化を西洋文化の移入として受けとめ、とかく自己の身許証明の不安に悩んだのであるが、事実をいへば、あの社会革命は半ば以上、日本の内発的な変化だったのである。」(傍点筆者)⁽⁵⁾ ここにおいて、集団主義を日本の産業化の動力とみる公文・村上・佐藤氏らとは全く逆の見方が示されていること、また、室町時代以来の社交文化に超歴史的な価値が与えられていることが特徴的である。

(3) 「柔らかな個人主義」

さて、「柔らかな個人主義」とはどのようなものであろうか？ 硬い個人主義における自我との対比で描かれたその自我は以下の如きものである。「生産する自我」、「純粹に能動的な主体」に対して「能動的でありながら受動的な主体（「自己の対象化と一体化を同時に行なう主体」）、「純粹に醒めた自我」に対して「醒め

ながら酔っている自我」、「操作する自我」に対して「操作しながらものにまぎこまれる自我」、「一面でかぎりなく機械に近い存在」に対して「非機械的な、したがって最も人間的な存在」、「技術的人間（主張する人間）」に対して「芸術的人間（表現する人間）」、「倫理的人間」に対して「美的な人間」、「剛直に信条を守ることが美德である」のに対して「一定のしなやかさを保ち、しかし、そのなかに危機的な一貫性を守ることが美德」など。この対比では、両者の特徴は明らかであるが、要約的には次のように定義される。硬い個人主義——「要するにそれは自己に対しては克己的であり、同じ理由から他人に対しては傲慢であり、理想主義的であると同時に、独善的な自我であった。さらに、この自我は本質的に逆説的な存在であって、信条を主張するという意味では個人主義者となり、自他を信条の手段となしうるという意味では、そのまま集団主義者ともなりうる自我であった。（現に近代の産業社会において、それは一方でもっとも華麗な個人主義思想の体系をつくりだしながら、同時に他方では、もっとも組織的な工場と国民国家とを創造したのであった。）」柔らかな個人主義——「自己の硬い信条を主張しようとせず、理性の立場から感情を排除しようとせず、いいかえれば、自分自身にさからって満足を先送りしようとはしない。反対に、それは現に満足を味わいながら自己を抑制している自我であり、幸福に酔いながら醒めている自我である。」

このような対比によって、たしかに両者の違いが際立たされるが、しかし同時に、表現があまりに比喩的すぎないか、また、何故「柔らかな個人主義」が単独で定義されえないのかという疑問も湧く。そして、その疑問は次の事実によってますます深まる。一つは、山崎氏が、両者の対立は「人間の内面的な態度の問題である」として、その違いが主観的なものであることを認めていること、また一つは、個人主義と集団主義を逆説的な関係ととらえていることと併せて、個人主義を集団化と無秩序の中間にあるとして次のようにいうことである。「日本人も西洋人も、論理的

には集団への忠誠と個人の尊厳は両立しうるものであり、秩序と矛盾しない個人の自由というものがありうることを認めている。にもかかわらず、現実の論争の場所においては、両者はたがいに相手の社会に両極端の影のみを見てとり、健全な中間状態の可能性を否定しあおうとしているのが、示唆深いのである。……振返れば、われわれは単に個人主義が集団化と無秩序の中間にあるということを知っているものの、しかし、それがどんな条件のもとで、どのような保証によってその中間状態を保ちうるかということを知らないからである。(傍点筆者) この観点からすれば、「柔かい個人主義」と「硬い個人主義」は集団化と無秩序の中間にあって、その違いは単に相対的なものにすぎないと言えいえるのである。しかも、「柔かい個人主義」における自我が、演技する自我、「他人をうちに含んだ自我」だとして次のように説明される時、この自我は個人と社会の自同化をめざした従来の個人主義とどこが違うのか、また、他人との調和的な関係をいすぎると日本の集団主義のいう「連帯的自律性」に似かよってくるのではないかという疑問が生じてくる。「ひとが消費という行為にかかわるかぎり、彼の自我は本質的に他人をうちに含んで成立するものであり、しかも他人との調和的な関係を含んで成立するものだといわなければならない」(傍点筆者) また、逆説的という修飾語つきとはいえ、個人主義が集団主義に反転しうるものならば、「柔かい個人主義」はますます不安定なものといえる。そして、その不安定さは実は彼の危機意識のなかに反映されている。即ち、彼は、一方では現代人の生活の多様化をプラスに評価し、それこそを「柔かい個人主義」のよりどころとしながら、他方では多様化がすすみすぎることに対して「統合」の見地から危機感を表明している。⁽¹¹⁾ この点を石井伸男氏は、「悪しき大衆化」によって社会の安定が崩されることに対する山崎氏の危機感であると批判している。⁽¹²⁾

(4) 日本的特性への疑い

しかし、「柔らかな個人主義」は、現状分析の点や日本となるものの国際化の論理批判の点では優れたものをもっている。前者についていえば、①「現代の日本人は男女ともに、その生涯の大半を職場や家庭のより多元的な帰属関係のなかですごし、さらには孤独な自分自身に向きあって生きることになった」という分析は、和を強調する「日本的集団主義」より科学的である。②タタマエとホンネの二重構造が日本人の精神構造であるとすれば、演技はそれに必然的に伴うものであり、演技的人間観に基づく山崎氏の分析は現代人の心性になじみやすい、換言すれば、現象の説明としては説得的である。③仮に山崎氏の立場が資本対労働という対抗軸における資本の側にあり、「家庭基盤の充実」という政府のイデオロギーの裏打ちにすぎないとしても、労働の側があまり取り扱ってこなかった領域を解明しているという意味で価値をもっている⁽¹³⁾。

「日本的集団主義」との違いは後者において鮮明である。山崎氏は一九八六年の中公論文で、浜口氏の「和魂、和才」の提唱とは対照的に「新しい『和魂洋才』」を提唱している。山崎氏は「和魂洋才」を「一種の精神の二重生活」ととらえ、安易な折衷主義よりは、その二重生活を継続する方がいいというのである。「日本の経営」についていえば、「このさい、もっともいけないことは、日本がこの経済的拡張を民族主義的に説明し、社会の『日本的特性』が成功の原因だと主張して、世界の納得を求めることである。……もし、日本人が外国の企業人に『日本の経営』を語り、それを世界共通の財産にしたいと願うのなら、外交的にも論理的にも正しいのは、そこから『日本的』の一語を取り除くことだろう。」⁽¹⁴⁾日本人の「集団志向性」を表現するのに「集団主義」を「日本的」の語によって限定しよう

とした浜口氏らとは全く逆の方向である。

注

- (1) 石井前掲書、一九六一—一九七頁。
- (2) ソフトノミックス・フォロアップ研究会報告書序文。
- (3) 山崎前掲書、第一章、とくに四四—四六頁。
- (4) 石井伸男『脱産業化社会』の夢と現実（東京唯物論研究会編『戦後思想の再検討』一九八六年、白石書店）。
- (5) 山崎「日本文化の世界史的実験」（中央公論、一九八六年六月号）七四頁。また、他の箇所では次のようにしている。
「日本人はむしろ江戸時代からウェーバー的な意味において個人主義者なのである。」（山崎前掲書、一二四頁）。
- (6) 山崎前掲書、一七一頁以下、とくに二七九—一八〇、一九一頁。
- (7) 同書、一八四—一八六頁。
- (8) 同書、一三四頁。
- (9) 浜口「日本人の連帯的自律性」（『現代の 에스プリ』一六〇号）、浜口・公文編『日本の集団主義』一九—二二頁。
- (10) 山崎前掲書、一六〇頁。
- (11) 山崎「市民文化と古典——多様化社会の危険に備えて——」（毎日新聞一九八六年十一月十一日）
- (12) 石井伸男前掲書、一八六一—一八七頁。
- (13) 佐藤氏によれば「資本主義に反対する運動は、基本的には資本—賃労働をめぐる直接的な関係に還元され、家族関係、男女関係、その他さまざまな関係における共同のあり方の独自性はあまり追求されなかったといつてよい。」佐藤和夫「人間が見えない文化」（唯物論研究協会編『思想と現代』創刊号、一九八五年所収）五二頁。
古茂田氏の試みは、この「新しい共同の形成の運動の未熟さ」を自覚した上で、労働の側がどうすべきかということに、一つの回答を示している。「山崎氏のいう『柔らかな個人主義』、『顔の見える社会』といったスローガンに一定のリアリティを認めた上で、その意味を市民の具体的な生活の側に奪いかえずことはできないだろうか？」古茂田宏「新保守主義の二つの顔」（『思想と現代』七号）六〇頁。

三 剛直な個人主義の復権

(1) 結 論

結論的にいえば、「日本的集団主義」は「日本的なるもの」を安易に肯定し、その普遍性に楽天的すぎる。換言すれば、既に現実には障害にぶつかったり疑問も出されている「日本的経営」の無条件の讚美という点でもどちらかといえば古い考え方に属する。これに対して「柔らかな個人主義」は「日本的集団主義」よりも、現状分析及び方向性の点ですぐれている。そのため現在人々に受け容れられやすい。しかし、この個人主義は、個人主義の硬直化、墮落に対する解毒剤にはなりえても、代替物にはなりえないのではないか？ つまり、個人主義の存立しうる間は個人主義の変種として機能しえても、個人主義の存立基盤そのものが崩されようとする時には、個人主義の否定という機能が前面に出てきて、自己矛盾を深めるのではないかという疑問がある。そして、その徴候は、そのような極限状態を待つまでもなく、既にあらわれている。たとえば、多様化に対する氏の危機意識や天皇制という、いわばハードなもの（註）の讚美のなかに。（註）（天皇制のハードさは、その本質面は勿論、現象面でも、教育現場における教科書や君が代問題に示されている。）ここにおいて「柔らかな個人主義」がイデオロギー的には「日本的集団主義」（＝ハード）の補完物であることが明らかである。

さて、このように「柔らかな個人主義」も個人主義という名でありながら、従来の個人主義否定という面での「日本的集団主義」との共通性の方に重点をおいて理解すべきだとすると、我々は改めて非難の対象となっている個人主義を偏見なく見直すことこそが肝要であることに気がつく。

(2) 個人主義と集団主義

個人主義か集団主義かというのは、個と全体との関係を「逆説的」関係とみる限りは、あまり意味のない問いであろう。というのは、この見方では、個人主義は同時に集団主義を意味するからである。公文・村上・佐藤氏の場合でも、ヨーロッパの個人主義を例外としながらも、そこに集団主義を見出しており、その意味で「日本的集団主義」との同一構造性を意識している⁽¹⁾。従って、個人主義か集団主義かという二者択一よりは、山崎氏のいうように集団化と無秩序化の間のどこに個人主義を位置づけるのかという問題設定の方が適当であるかもしれない。

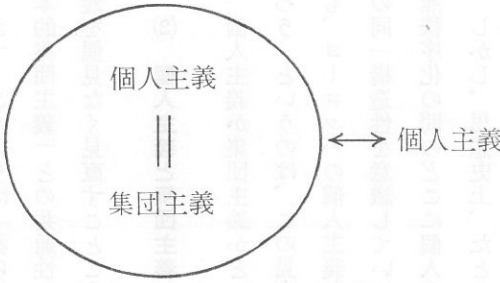
しかし、思想上、たとえばロックが個人主義者か集団主義者かということがながらく争われてきたということからも明らかのように、この問題の意味は決して小さくないと思われる。そして、この論争におけるC・B・マクファーンの見解は極めて示唆的である。即ち、彼によれば「ロックの個人主義、つまり出現しつつある資本主義社会のそれは、個人に対する国家の至上権を排除するのではなくて、反対に要求する。それは、個人主義が強まれば強まるほど集団主義は弱まるという問題ではなくて、むしろ個人主義がより徹底すればするほど集団主義はより完全になる」という問題である⁽²⁾。「この見解においては、個人主義と集団主義はお互いに含意し合っていることが明らかであるが、しかし、この解釈が成り立つのは「平等で差別されない人々（『勤勉で合理的』でかつ所有をもった人々）から構成

されたような社会の観念」をロックがもっていたと仮定した場合であり、そのロックが正しいといえるのは、そのような社会が現実存在した場合である。つまり、これは社会が中産的市民階級からのみ構成されている場合にのみ成り立つ見方である。

問題は、社会の同質性が存在しない状態で、個人主義と集団主義の関係がどうなるかである。私はこの状態（これが歴史の現実だと思いが）においては上図のように、「個人主義」対「集団主義」に対して、新たに「個人主義」が対立するしかないのではないかと思う。異質なものの価値を認める限り。そして、そこにおける個人と全体との関係は「逆説的」なものではなく、あえていえば「弁証法的」なものであろう。逆説的関係という説明をする限り、個と全体との円環構造から抜け出すことは不可能である。（円内の個人主義と円外のそれとの関係については更に詳しい説明を要するが、それは別の機会に論じたい。）

(3) 剛直な個人主義

戦後日本の現状認識の問題としていえば、個人主義のむしろ墮落形態の方が目につくが、しかし、本来の健全な個人主義が存在していること、少なくとも——それが十分実現していないとしても——可能性を秘めつつ存在していることを認識しなければならぬ。このことを、戦後世代はいわば「内側から」、即ち自己認識として認識しているのであるが、矢崎光圀教授は「外側から」即ち、文字通り客観的に認識してい



るといえよう。

「私どもは日本人が一〇〇年にわたって西欧から学んできた歴史を想い出す必要がある。それは私どもにとって無意義であり、時間の浪費にすぎなかったのだろうか？ そうではない。たとえば「人権と私権をもち、しかも戦後民主主義の内面的エートスをもった主体としての個人の考え。」根なし草か？ そうとはいえない。今日なお重要な意義をもっている。……それらを日本人は学んだだけではなく、ある程度は実現にもたらしめている。」(傍点筆者)

反対に、「日本的集団主義」のいう和の精神で生きようとする、その基盤の失われた現代においては、現実との不適合、そしてその極限としての精神病理を生み出すことが認識されなければならない。山口氏の次の記述は、そのような事態の客観的分析に止まらず、何をなすべきかについても貴重な示唆を与えている。「『甘えの氾濫』はまさに日本における精神病理的現象にはかならないということ、日本における伝統的な価値規範の拘束力の崩壊の表現にはかならないということ、いいかえれば、稲作農業共同体という下部構造に支えられるときには有効に機能できたモラルを重化学工業化を完了した『都市化』社会の『核家族』に『意図的』に適用しようとする努力は、かえって精神病理的荒廃に帰着することを避けえないということ、変化した社会は『個人の確立』を基礎とする新しい連帯のモラルを客観的に要請しているということ、を意味するものであると考えなければならない。」また、「柔らかな個人主義」がいうように、一つの集団・組織に全面的に帰属するのではなく、多様な組織に属してバランスよく生きようと思えば、おそらく国家に対しても各種の集団・組織に対しても「柔らかな」姿勢では対処しえないであろう。なぜなら、「柔らかな個人主義」もそれが一つの生き方である限りは「貫く」という硬い姿勢が必要であるからである。「柔らかな個人主義」の主張を現実化するためには、実は「剛直な個人主義」こそが必要なのである。

従って、価値意識の問題としていえば、すでに根付いている個人主義、あるいは可能性を秘めつつ逼塞している個人主義に価値を認めること、そしてそのためにはむしろ「剛直な個人主義」の立場に立つことが必要である。

このような主張に対しては、個人主義の問題性について楽天的すぎるという批判があることには気がついているし、また、とくに日本における個人主義には問題が大きいということも忘れてはならない。間庭充幸氏が「わが国における『人間的主体性』の確立は、いかに逆説的であっても、日本の歴史的伝統に根ざす集団的原理との一定の関係をぬきにして考えることはできない」として「日本的ゲマインシャフト」に分析を加えていること⁽⁵⁾や、古茂田氏が「柔らかな個人主義」のなかに含まれる共同性への契機に注目していることなどにみられるような問題設定の仕方は必要であるし、私にとって示唆的である⁽⁶⁾。

最後に述べたいのは、実はこれは日本のみの課題ではなく、欧米との共通課題でもあるということである。日本のある程度根付いた個人主義は、たとえそれが日本的に変形されているとしても、個人主義のマイナス面が急速に露呈しだした欧米にとっては一つの可能性であり、また、欧米における個人主義の「行きづまり」は日本がそれによって既に浸透されているが故に日本自身の問題でもある。西尾幹二氏の次の観点の重要性はどれだけ強調してもしすぎるということはない。「我々がヨーロッパを裁くとすれば、それは自分自身を裁くという意味を含んでいなくてはならない。」⁽⁷⁾

注

(1) 「西欧での初発的近代化は、たしかに個人主義の極に近い価値観に根ざしている。だが、より細かく見れば、近代化の担い手としてのブルジョアジーは、実はある種の家族の家長であり、個人主義は『個家族主義』の側面をもっていた。さらに少く

とも大陸ヨーロッパにおいては、それらの家族の作り出す地域集団や職能集団の経験が、産業化と個人を媒介する役割を果たした。……西欧の個人主義は原子化された個人を念頭においていたものでは決してなかった。個人主義の極に最も近い形は、……ヨーロッパ固有の集団主義から絶縁したアメリカという飛び地において展開されたのである。」公文・村上・佐藤「イエ社会としての日本」六六頁。

- (2) C・B・マクファーンソン著、藤野・将積・瀬沼訳『所有的個人主義の政治理論』合同出版、一九八〇年、二八二頁。
- (3) 矢崎光圀「法をめぐる異文化相互の距離と接合」(一九八六年十一月日本法哲学会報告)
- (4) 山口正之「日本の共同体の崩壊と『近代化』」(『科学と思想』新日本出版社、一九八六年十月号)
- (5) 間庭充幸『共同態の社会学』世界思想社、一九七八年。
- (6) 古茂田前掲論文。
- (7) 西尾幹二『ヨーロッパの個人主義』(講談社現代新書) 五六―五七頁。

[付記]

この論説は、一九八七年八月に神戸で開かれた法哲学―社会哲学国際学会連合第十三回世界大会(略称 IVR '87)で行な
った報告「The Ideological Meaning of Japanese Collectivism and Soft Individualism」に手を加えたものである。

